

# NPO法人「かごしまホームレス生活者支えあう会」の沿革

## 1990年代半ば

---

より、全国の傾向と同じく鹿児島でもホームレス生活者を見かけるようになった(「シェルターレス」誌15号—新宿ホームレス支援機構発行—山口氏報告)労働の規制緩和とも相まって「寄せ場の全国化」とも言われる様になった。

## 2004年

---

大雪をきっかけに市民の自発的ホームレス支援が始まる。  
教会が週1回の炊き出し、夜回り、寝袋、衣類等の物資支援を開始、市民有志参加炊き出しの現場は、当事者が困り果てた窮みの場。「今の日本は定期的におにぎりを配るという活動を継続することができれば、ただそれだけでネットワークが形成できる時代だ」と驚きを感じた。

## 2005年

---

**2月** 任意団体「鹿児島野宿生活者支えあう会」をロッセリア店内の会議で5名で設立。  
先の活動に加えて、法律・福祉の専門家の相談活動、生活保護申請支援が始まる。地域生活者支援センター「櫻島館」の元ホームレス生活者自身が週2回のおにぎり配りを開始。グリーンコープ等からも支援物資等が寄せられる。

## 2006年

---

同上の継続  
**12月31日** 大晦日「年越しソバ会」開始、以降恒例化

## 2007年

---

**1月1日** 元旦「お雑煮会」以降恒例化  
  
**8月** NPO法人「かごしまホームレス生活者支えあう会」設立  
(上記「野宿生活者支えあう会」と「櫻島館」が合同)設立記念集会の呼びかけに、ある労組は「ホームレス問題に関心もないし、時間もない」と応える。  
「2007かごしまのホームレス生活者実態調査」実施、同「報告書」編集発行(市の調査44名に対し70名を確認)NPO設立以降、週3回火、木、日の「おにぎり+相談会」(中央公園PM5:00より)月1回の夜回り+支援カレンダー配布、月1回の調理+食事会、年

数回のガレージセールを継続している。

\*このころまでに生活保護につながって畳みに上がったホームレス生活者は約150人

\*地域づくり=EU諸国の経験、「社会的排除から社会的包摂へ」が注目されるが、EU諸国と違い、国・自治体の福祉・社会保障の削減方向の下では歯軋りを余儀なくされる。

\*「反貧困ネットワーク」等にも積極的に参加する必要を確認

**12月8日** 「生活保護基準切り下げ緊急抗議かごしま集会」呼びかけ、160名

**12月25日** 支えあう会+当事者+ワーカーズコープの3者での「新しい協同による就労支援委員会」発足、以降月1回の会議を継続

## 2008年

**1月26日** ワーカーズコープ<就労説明会>開催「自分たちの手で、就労の可能性を切り開きましょう。」

**2月17日** ワーカーズコープ主催のソーシャルインクルージョン(社会的包摂)についての「講演+シンポジウムにパネリストとして参加(堀之内)

**6月頃**までは、九州各地のホームレス支援団体に派遣会社から期間労働者募集の案内が届くほどであった。そのほとんどは愛知方面への派遣が主だった。我々は、派遣会社の募集の下請けになる訳にはいかないと対応しなかった。その後、8月に表面化したリーマンショックから始まる世界金融恐慌から世界大不況の中で、瞬く間に状況は逆転した。

**7月15日** 北村年子氏が来鹿、オニギリ会参加された後、交歓の機会が持てた。

**16日** 「グリーンコープかごしま」での北村年子氏講演会が開催された。

**17日** 2名の元ホームレス生活者Sさん、Kさんが鹿大伊藤ゼミで報告。現在の社会では誰でもホームレス生活者に陥る可能性があること等を体験に基づいて、淡々とした語り口の中にも説得力と迫力をもって学生にたたみかけていた。

**8月** 谷山「にわ都市公園」でも「おにぎり+相談」会開始(毎月曜)

**8月3日** 反貧困キャラバン鹿児島集会「人間らしい生活と労働を求めてつながろう!」をスローガンに、約200名の参加の下に開催された。弁護士・司法書士中心の実行委員会で芝田理事が、実行委員会事務局を担当。

基調講演、湯浅誠氏 パネラー、天羽浩一(鹿児島国際大学、子供の貧困について) 伊

藤周平(鹿大法科大学院教授、高齢者の貧困、社会保障制度について) 高木田健康(弁護士、生活保護、北九州の経過と現状について) 当事者報告 派遣労働体験者(生健会) クレ・サラ被害者(くすのき会) 元ホームレス生活者(支えあう会)

#### **10月12日 九州連合合宿・鹿児島からの活動報告にて**

今般の世界恐慌に対して、我々も無縁ではないし、状況は急迫しており、せめてケインズ型の復権にまで、広範で強力な国民運動といったことが必要ではないだろうか？(ちなみにケインズは「金利生活者の安楽死」といったことを述べていて、フリードマン等の新自由主義からは敵視されていた。)との提起を行った。

**10月15日** ビックイシュー誌の鹿児島での販売開始、同サポーター発足。

「おにぎり会」への新規参加者に若年失業者の増加が顕著になり、

**12月初め**には派遣切りのM君が初めて相談に訪れる事態になった。以降現在まで続く。

**12月11日** 鹿児島市立西陵中学校(山下元校長)で、元ホームレス生活者 T さんが人権学習の一環で講演した。約500人の生徒に半生を語り、「1人の人間として見てください」と呼びかけた。

年末年始の年越し蕎麦会や雑煮会に現元当事者や支援者約50人参加、「皆が育てたい得がたい場」になりつつあるのではないだろうか。

## **2009年**

### **3月9日 鹿児島派遣村実行委員会**

「支えあう会」と連合鹿児島、県労連など労働団体と社会保険労務士や司法書士など専門家の有志で、「鹿児島派遣村」開設を目指し、実行委員会を設立した。

### **3月28日 鹿児島派遣村開村**

3月28日に鹿児島派遣村実行委員会として46名の参加を得て夜回りを行った。鹿児島市による2009年1月のホームレス調査では、20ブロックで合計33名だったが、我々の夜回りで、面談+目視+生活痕確認を行った16ブロック調査で合計49名であった。期間限定で開設した5部屋のシェルターに7名を繋ぎ、生保申請、就労相談を継続してきた。

### **鹿児島派遣村、相談者概要 総数 のべ24名**

内訳(重複あり):派遣切り・雇止め=7名、不当解雇から困窮=1名、ホームレス生活者=2名、ニアホームレス生活(家賃滞納等)=2名、

帰省したものの居られなくなった＝2名、障害を抱えた方＝4名、刑余者＝1名  
結果：10名が生活保護申請、3名が離職者支援の利用手続き、1名旅費貸付一帰島、  
独自シェルターの経験が大きかった。現在も相談や居宅後支援や就労支援を継続してい  
る。

社協の生活福祉資金制度、離職者支援資金など利用の敷居の存在で現場で使えない  
現状。

**今後の展望** 鹿児島派遣村の動きが、現状では、相談を受ける専門家とボランティアの範  
囲に留まり、当の労働者(組合)の動きをどう作るのかが課題。鹿児島労働局によれば、県  
内の派遣など非正規労働者への雇い止めは、3月末までに1,476人に上る。

鹿児島派遣村の活動現場の実態に沿えば、生活相談と労働相談の垣根は無くなったと  
言えるだろう。

**8月16日** 鹿教組夏季活動者学習会にて活動報告(堀之内)

**10月30日** 鹿国大で堀之内とSが特別講義

**11月7日** 同 芝田とOが特別講義

**12月25日** 鹿児島派遣村年末越冬夜回り

**26日～28日** 同相談会

**大晦日** 年越し蕎麦会に現元当事者や支援者約80名の参加

## 2010年

**年始** 雑煮会に現元当事者や支援者約50人参加、「皆が育てたい得がたい場」として定  
着つつあるのではないだろうか。